

日本医学会分科会活動報告

学会名(No.130)一般社団法人日本脳神経血管内治療学会

代表者名 理事長 宮地 茂

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会の独自の活動を以下に留意して記載をしてください。

a. 特に学術的に重要と考えられるもの

①脳血管内治療の有効性の科学的根拠の確立と治療指針の策定

脳血管内治療は近年急速に適応症例数が増大しているが、その有効性を示す科学的根拠はいまだ十分ではない。特に脳動脈瘤や脳主幹動脈閉塞に対する血管内治療件数が増加しており、エビデンスの集積が必要である。当学会ではエビデンス確立のための学会助成研究や症例研究を行っており、年次学術集会ではシンポジウムとして議論し、機関誌でそれを世界に公開している。

また新規治療機器・治療法に関する指針を、脳神経外科学会、脳卒中学会等の他学会と協力し策定している(IIを参照)。特に近年治療症例数が急増している血栓回収療法に関しては、当学会が中心となり、経皮的血栓回収機器適正使用指針(2013、2014改定、2015改定、2018改定、2020改定、2021補遺)を策定した。

②稀少疾患の病態解明と治療法の確立

症例数が少なく、病因や治療法が明らかとなっていないが重篤な症候を呈する疾患に関しては、学会が主導してそれを明らかにしている。現在までに、頭蓋頸椎移行部動静脈瘻、脊髄硬膜および硬膜外動静脈瘻、仙尾部動静脈瘻、血管内治療後遅発性脳症、脳動静脈瘻、遺伝性結合組織疾患(エーラス・ダンロス症候群)に伴う脳血管障害障害、椎骨動脈解離性動脈瘤、小児血管奇形などを取り上げ、成果を挙げている。

b. 当該領域における国際的な役割

当学会は、脳血管内治療に関する世界連合(WFITN: World Federation of Interventional and Therapeutic Neuroradiology)に1980年の設立時から参加し、役員を常に輩出してきた。現在は当学会から理事長と理事の2名を派遣し、各国の関連団体と連携している。また1995年の定期学術集会は我が国(京都)にて開催された(本邦開催は2回目)。

機関誌(Journal of Neuroendovascular Therapy; JNET)の完全英文化を行い、PMC(PubMed Central)およびESCI(Emerging Sources Citation Index)への掲載が決定されたことで、国際ジャーナルとしての地位が確立されつつある。

c. 活動からもたらされる社会的な意義

専門医制度は2000年より認定を開始しており、筆記試験のみではなく口頭実技試験も実施しており、知識のみならず技術の担保にも力を入れている。さらに、毎年1回の生涯教育セミナーを実施し、5年に1回所定の実績を有する者だけが資格を更新できる。一定のレベル以上の専門医を毎年輩出するとともに、生涯教育と更新制度を通じて治療医を認定する事業は社会的に極めて重要なニーズの一つと認識しており、我々の学会事業の中心的事業の一つと位置づけている。

また改正薬機法のもと、学会自身がデータベース事業者となり、新規医療機器の本邦への導入時の有効性と安全性を確認するデータ集積を行っている。現在4品目の調査を行っており、今後もその品目は増

える予定である。

先述した治療指針の策定と、専門医制度、データベース事業は、国民に対する安全で有効な脳血管内治療の普及に貢献している。

#### d.学会運営上留意している点

本学会は、脳神経外科、神経内科、放射線科、救急科などの医師が所属する横断的学会であり、会員の9割を占める脳神経外科医の母学会である日本脳神経外科学会の中で最大のサブスペシャリティの学会となっている。

本会は日本における脳神経領域の血管内治療に関する唯一の学会で、学術集会の開催、機関誌の発刊、専門医制度の運営、データベース事業を中心に学術活動を行っている。また7地方会(北海道、東北、関東、中部、近畿、中四国、九州)を組織し、各地方会主催の年1回以上の学術集会(地方会)を運営し、地域性にも配慮している。

また会員は医師のみではなく、放射線技師、看護師、コメディカルなど多職種にわたり、その多様性に配慮し、2020年よりダイバーシティ推進委員会を立ちあげ活動を開始した。

会員数の急増にともない、運営のスリム化と円滑化のため、2023年に法人格をNPO法人から一般社団法人に変更し、選挙制度、専門医認定制度など変更した他、地域格差の是正、ダイバーシティや働き方改革などを考慮する運営を取り入れた。

#### II.日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会と他の分科会との連携による活動を記載して下さい。

脳神経外科学会、脳卒中学会等の分科会と策定した実施基準・適正使用指針を列挙する。

頸動脈ステント実施基準(2007、2012改定)

液体塞栓物質を用いた塞栓術実施基準(2008、2014改定、2021改定)

経皮的経管的脳血栓回収機器実施基準(2010、2020改定)

経皮的血栓回収機器適正使用指針(2014、2015改定、2018改定、2020改定、2023改定)

頭蓋内動脈ステント(脳動脈瘤治療用、動脈硬化性狭窄治療用)実施基準(2009)

頭蓋内動脈ステント(脳動脈瘤治療用、動脈硬化性狭窄治療用)適正使用指針(2013)

頭蓋内動脈ステント(脳動脈瘤治療用 Flow Diverter)適正使用指針(2012、2014改定、2020改定)

頭蓋内動脈ステント(脳動脈瘤治療用 Flow Diverter)実施基準(2015)

Pipeline Flex フローダイバーターシステム 実施医研修プログラム(2015)

脳動脈ステント(動脈硬化症用)適正使用指針(2013)

エンボスフィア適正使用指針(2014)

分岐部ワイドネック型脳動脈瘤治療機器実施基準(2020)、同適正使用指針(2020)

経頸動脈ステント留置システム実施基準(2022)

脳血管内治療用中間カテーテル適正使用指針(2022)

脳神経領域における液体塞栓物質実施基準(2022)、同適正使用指針(2023)

先端部可動型マイクロカテーテル 頭頸部頭蓋内血管 適正使用指針(2022)

Onyx 液体塞栓システム LD 実施基準、製品導入要綱(2024)